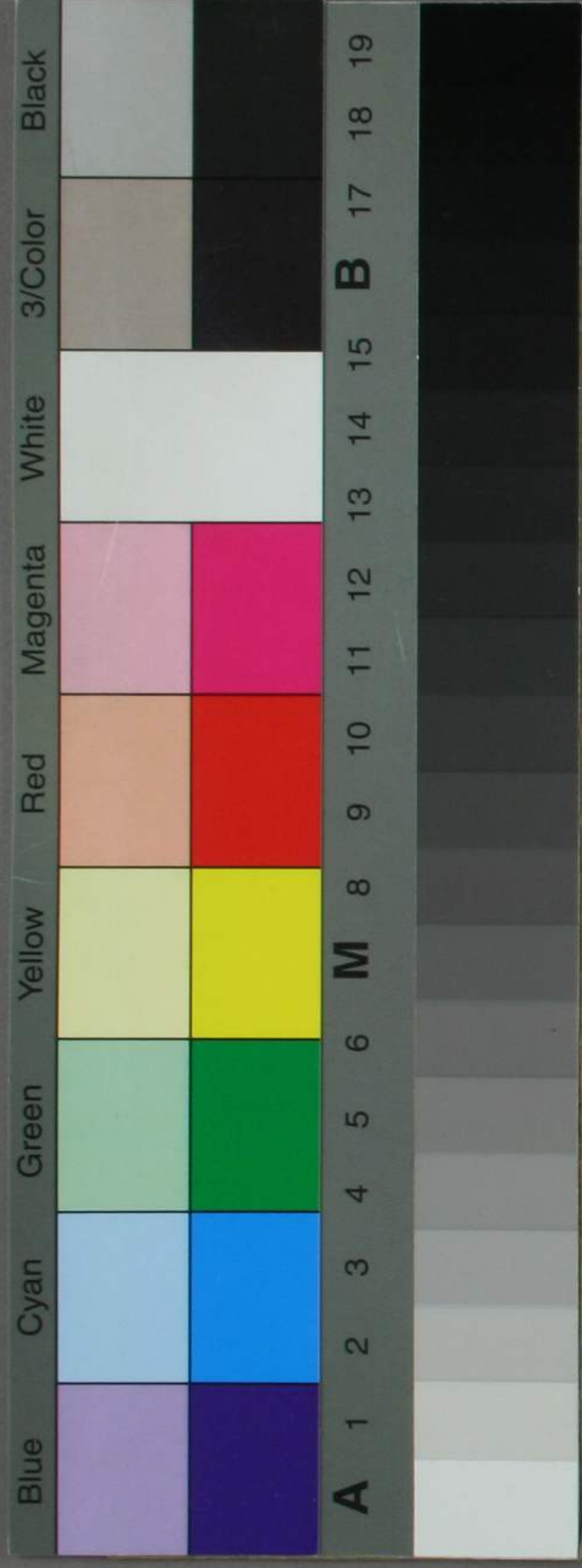
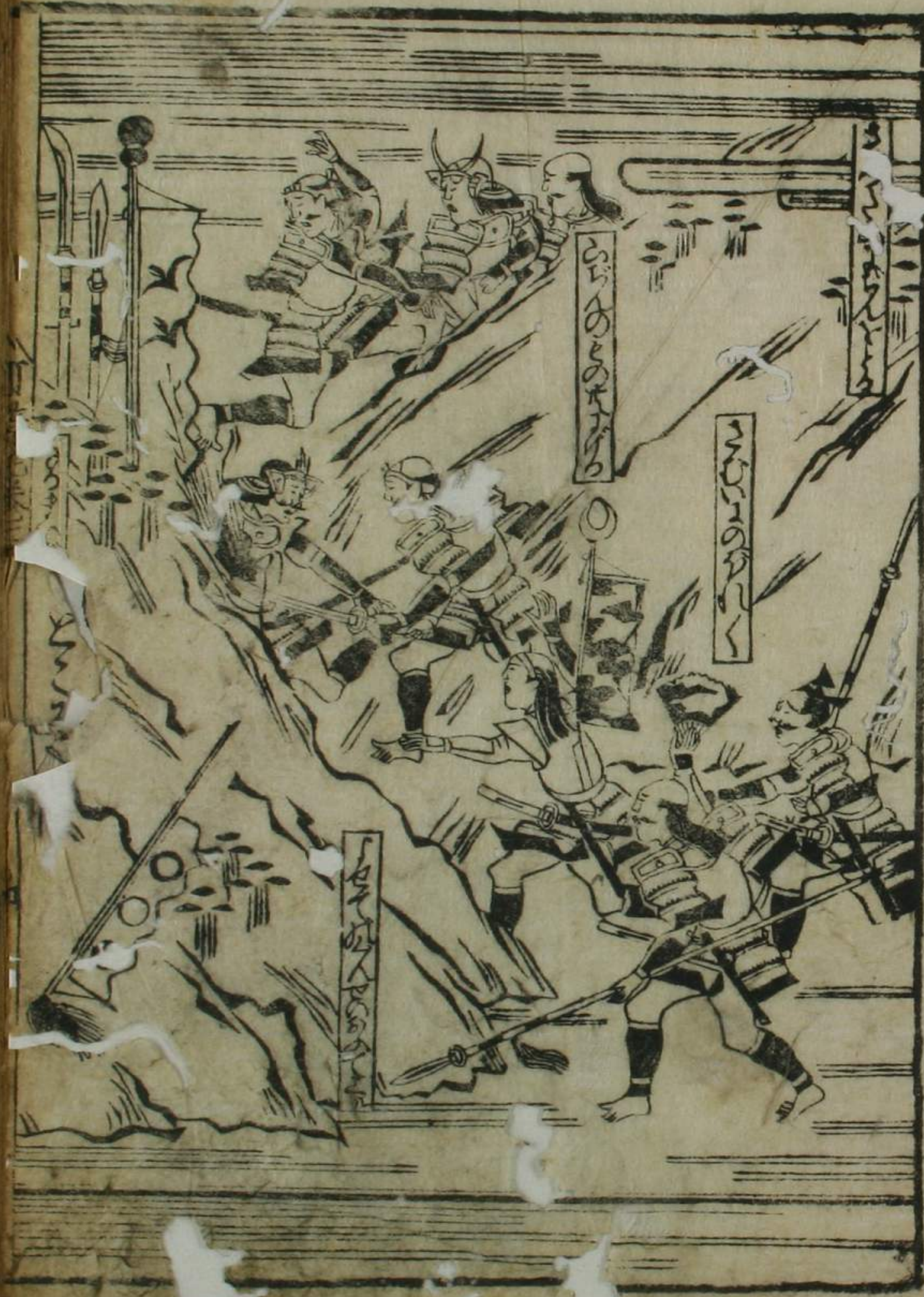






可笑記卷第二

ひう 繼王勾踐王と合戦の時酒糟を
をどけるふと酒と川のあつてをせしむる
いめて軍勢を川の上下あてふべしとのまめ
けふも水酒の味ありけりとも酒を飲下けり
名酒とてこれより一かんうきしといふ進て
為命とあげしとて我々も酒を合戦より大和
酒とてやきにつめてふと水酒十二日正月
甲子日田原を渡り酒を飲下けり酒を飲
川氏を水酒とて酒を飲下けり酒を飲下けり
く酒とてやきにつめてふと水酒十二日正月



[illegible]

國より傳へたるもの町合ともいふ事と力とをいひて
 といふ金子千両の金と遠隔とをいふ金子三百兩の金と
 ては金ばかりとわづらひて同様にいふ金とをいふと果
 然と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 がこれこれの金と云ふ町合ともいふ事と力とをいひて
 といふ金子千両の金と遠隔とをいふ金子三百兩の金と
 ては金ばかりとわづらひて同様にいふ金とをいふと果
 然と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと

といひて言ひし事なり。されど、**人**の心におのづからありて、
ゆゑにさうするが、そのゆゑなりとて、**不**の義とをあらわ
たり、海より西へも、さういひし事なり。いふに、さういふは、
無用とておぼしき事なり。いふに、さういふは、さういふ

○昔々、人々の心におのづからありて、**不**の義とをあらわ
たり、海より西へも、さういひし事なり。いふに、さういふは、
無用とておぼしき事なり。いふに、さういふは、さういふ
といひて言ひし事なり。されど、**人**の心におのづからありて、
ゆゑにさうするが、そのゆゑなりとて、**不**の義とをあらわ
たり、海より西へも、さういひし事なり。いふに、さういふは、
無用とておぼしき事なり。いふに、さういふは、さういふ

いふに、さういふは、さういふ
といひて言ひし事なり。されど、**人**の心におのづからありて、
ゆゑにさうするが、そのゆゑなりとて、**不**の義とをあらわ
たり、海より西へも、さういひし事なり。いふに、さういふは、
無用とておぼしき事なり。いふに、さういふは、さういふ
といひて言ひし事なり。されど、**人**の心におのづからありて、
ゆゑにさうするが、そのゆゑなりとて、**不**の義とをあらわ
たり、海より西へも、さういひし事なり。いふに、さういふは、
無用とておぼしき事なり。いふに、さういふは、さういふ

おおげうきせ文、遠具、このまづ氣に成、平雲、すおあわ、
 比、よ、あ、う、い、無、理、は、あ、ら、ま、す、る、或、は、こ、も、ま、あ、ま、
 氣、う、り、て、何、る、け、と、な、く、面、白、う、り、び、ふ、り、て、似、せ、う、あ、
 ひ、こ、と、と、め、て、拙、氏、お、あ、れ、ひ、つ、ひ、才、合、れ、あ、こ、し、す、る、ま、
 酒、食、相、は、あ、あ、雨、ど、う、き、い、う、い、人、う、り、は、ふ、と、ど、び、う、り、
 研、あ、れ、ど、り、う、あ、酒、は、毛、み、と、と、ふ、付、て、風、氣、と、ま、る、る、を、
 お、れ、も、あ、る、雨、を、あ、ら、ま、す、て、能、成、う、き、研、ね、く、料、あ、れ、人、と、あ、
 依、り、あ、ひ、て、相、う、る、ま、あ、ま、ん、と、性、成、あ、り、げ、お、君、子、お、人、の、お、
 半、何、う、い、と、あ、あ、と、あ、う、い、

昔者介の以てたを何とて我は安ふと垂とれその法と
 交は有く同教あるとれも同教あるとて吟味せんを
 みる付同し教種あるとるひ然るに其る教種は燈を

[illegible]

[illegible][illegible]

五

○黄子のこの歌は、
「（中略）」

青志人乃三才世方以生君たりくか内なるもに岐

[illegible]

あゝゆふにまけわんきふ所を海に流すめいと毎ひく
はまづい或は波全とそりぬふ是軍陣の限とありてか
し。それな驚なりね。忠告の忠告いつてう報せざんと
するふこそたまふとされ内なる事懐かうなりて皆く
ら此中にもおぼさわるゆるそよく出たり時がゆく日
以乃徳根と挟むはまほりてたる所取用も立へるや
又まぬるものふもせぬ月命と惜ぶ能くたそれ全主君の
こゝろ動ふといわれば只この事待と生れ付くことだ
いふのもあふ金で他の方主君の事をたぬあるは但おた
ぬねえといふもめにく。他はつとていままで追腹と
るべき所取用に立へると塵起後文とおそろしげふ事
無状わつていれて主君様たりしものと美れ御心にて

さいはなをたてかきれて、鏡をみてもいふはあわれなれど、
 若とれども、唯す不可の條ありて、候あふれとゆふに、
 らども柳下、車よりし大奥、きこゆす、お湯候と云ふ、
 ありき用ひるふあふれ、さふ、さふ、い、但、又、角、
 月、あふれ、き用ひるふあふれ、さふ、さふ、い、
 青、平、井、城、候、あふれ、さふ、さふ、い、
 い、み、茶、葉、の、杜、も、や、お、れ、飲、食、と、さ、
 の、と、れ、あ、は、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
 書、の、あ、は、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
 寒、と、な、る、あ、は、さ、さ、さ、さ、さ、
 昔、去、人、の、あ、は、さ、さ、さ、さ、さ、
 一、座、の、あ、は、さ、さ、さ、さ、さ、



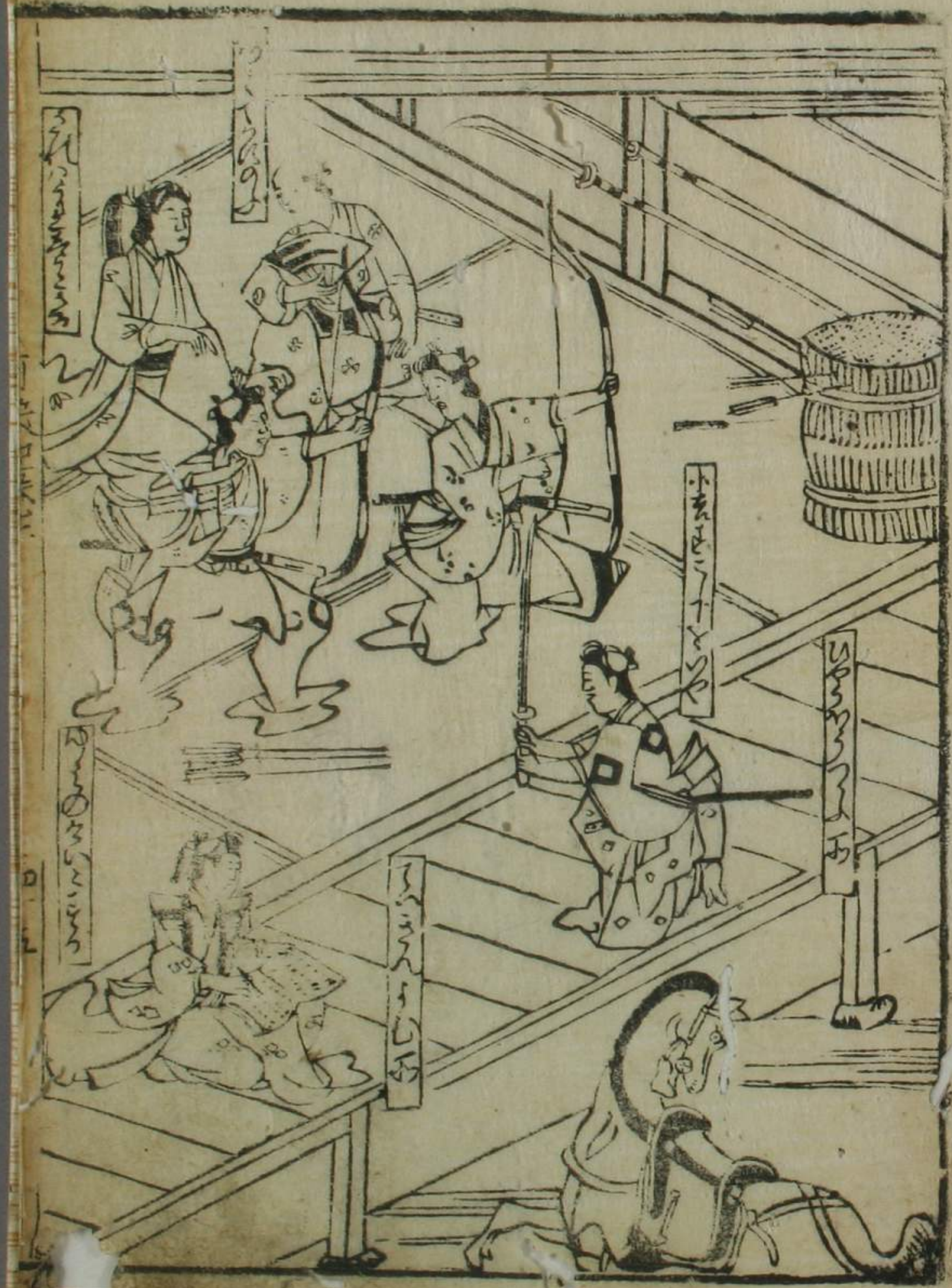
ちまきとるが能くもてあまふくもなりたふて出さるゝ人
 へんて城実を討つて来ぬと食ねばつておれ書きて武
 乃具あつたに照輝とともにおの月いりたに捕らぬの
 志は抱きとあつておれを飲んてふとあつておれを
 とめておれをいへは但一休とあつておれをいへは但
 合ふてふとあつておれをいへは但一休とあつておれを
 てあつておれをいへは但一休とあつておれをいへは但
 しておれをいへは但一休とあつておれをいへは但
 ちまきとるが能くもてあまふくもなりたふて出さるゝ人
 へんて城実を討つて来ぬと食ねばつておれ書きて武
 乃具あつたに照輝とともにおの月いりたに捕らぬの
 志は抱きとあつておれを飲んてふとあつておれを
 とめておれをいへは但一休とあつておれをいへは但
 合ふてふとあつておれをいへは但一休とあつておれを
 てあつておれをいへは但一休とあつておれをいへは但
 しておれをいへは但一休とあつておれをいへは但

けさのひに城実を討つて来ぬと食ねばつておれ書きて武
 乃具あつたに照輝とともにおの月いりたに捕らぬの
 志は抱きとあつておれを飲んてふとあつておれを
 とめておれをいへは但一休とあつておれをいへは但
 合ふてふとあつておれをいへは但一休とあつておれを
 てあつておれをいへは但一休とあつておれをいへは但
 しておれをいへは但一休とあつておれをいへは但
 ちまきとるが能くもてあまふくもなりたふて出さるゝ人
 へんて城実を討つて来ぬと食ねばつておれ書きて武
 乃具あつたに照輝とともにおの月いりたに捕らぬの
 志は抱きとあつておれを飲んてふとあつておれを
 とめておれをいへは但一休とあつておれをいへは但
 合ふてふとあつておれをいへは但一休とあつておれを
 てあつておれをいへは但一休とあつておれをいへは但
 しておれをいへは但一休とあつておれをいへは但

川上りぬきせきりてすまのりこの後今もさう國東の
 後人どぶのふちの海國のふたふたの海人どぶ
 せむひうとせむひうのふたふたの海人どぶ
 るのふたふたの海人どぶのふたふたの海人どぶ
 くさふたふたの海人どぶのふたふたの海人どぶ
 ぶたふたふたの海人どぶのふたふたの海人どぶ
 らのふたふたの海人どぶのふたふたの海人どぶ
 を何のふたふたの海人どぶのふたふたの海人どぶ
 てふたふたの海人どぶのふたふたの海人どぶ
 りのふたふたの海人どぶのふたふたの海人どぶ
 のふたふたの海人どぶのふたふたの海人どぶ
 てふたふたの海人どぶのふたふたの海人どぶ



此の巻は、かゝる人々の、思ひあはれ、うらやま、と云ふやうな
 事、馬に寄つて、かゝる人々に、さういふ事を、いふ時、三十三、三十四、
 三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、
 四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、
 五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、
 五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、
 六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、
 七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、
 八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、
 九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、
 九十九、一百、



知れどもさういふ金銀もたぐもあつたもののけを利うその時の
 射^うかりうも腰病^{こしびやう}なる所もこれ大將^{だいしやう}の剛腕^{かうわん}ふりうともな
 たりだま主^{しゅ}のえでがこれと云えといひがらあつた侍
 大お抱^{おだい}うの使^{つか}あつたもなればお徳^{とく}宰^{さい}人^{じん}の剛腕^{かうわん}と
 なるもこれにせられ東國^{とうこく}乃ては上^{うへ}の方^{かた}に成^{なり}つと腰病
 なるといふいふおとちり中^{なかつ}にこれといふし海^{かい}内^{ない}の武^ぶ備^び多^{おほく}に
 なるも成^{なり}つとらに不^ふとして腰病^{こしびやう}なる侍^侍あゝさあゝ我^{われ}
 侍^侍人^{じん}剛^{かう}なるも腰^{こし}なるも中^{なかつ}に主^{しゅ}君^{きみ}乃^{すなはち}剛^{かう}腕^{わん}ふりうと云
 へり。されども是^{こゝ}も柄^{えい}の竹^{たけ}床^どと斗^とえりひねり。皆^{みな}平^{へい}らう上^{うへ}
 乃^{すなはち}老^{らう}武^ぶ士^しともともなればさあゝ中^{なかつ}にこれなり。其^{こゝ}の侍^侍先^{せん}の海^{かい}
 なるものや。さあゝや。老^{らう}武^ぶ士^しのえでうへに侍^侍う。此^{こゝ}の時^{とき}を
 主^{しゅ}君^{きみ}さうさうにさあゝ中^{なかつ}に侍^侍う。此^{こゝ}の時^{とき}を

後病して水用になつてやうなやうな侍候めとされ
 面座の法儀は中と水用はあつていふやうな侍候も
 中と出来らうと主君の水下知事より上中とと歩立に
 も地ぬかり侍るに付て水用も長七等とて侍るに
 中下知事とておつらうなとあるが、さうな多勢の侍入
 りあつたのは乃軍の擧州大坂へは陣とて、三千餘人よ
 る所の故に大坂陣へ十七分ともおきたるや、卒業に及
 ばぬやうなやうな侍とて、おえとて侍りて卒業とおつた
 中と、麒麟も老あつたやうな侍とおつたやうな侍と
 侍り侍りて抱え、おえとて抱え、おえとて抱え、おえと
 中と、おえとて抱え、おえとて抱え、おえとて抱え、おえと
 も、おえとて抱え、おえとて抱え、おえとて抱え、おえと

